

受講番号 18027 学校名 高知小津高等学校 氏名 籠尾 悦子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 39人名
 科目名 英語Ⅰ 単位数(授業時数) 4単位時間 使用教科書名 ONE WORLDⅠ

クラスの様子・特徴

男子21名、女子18名のクラスで、その中で32名の生徒が部活動に所属しており、補習必修のクラスではない。活発なクラスであるが、学習面においては十分に家庭学習の時間が確保できている生徒は少なく、英語に苦手意識の強いを持つ生徒が多い。

問題の確定

英語の苦手意識が強く、基本的な語彙が少ないが、音読の声が良く出るクラスである。音読を通じて基本的な語彙を定着させたい。

予備調査

A 授業の観察

元気に発言をし、授業のムードを盛り上げる生徒も数人いるが、全体的にかなり落ち着きに欠けるところがある。家庭学習の習慣が身についてなく、宿題が一人でできず、提出率も良くない。ALTの授業では積極的に発言したり、活動をする事ができる。

B 生徒による授業評価

1学期当初の授業評価では、授業は楽しいが、内容が完全には理解できていない生徒がいた。中学校からのブリッジングに気をつけて、指導したが、高校英語の語彙量の多さに苦しみ生徒像も見られた。

C 学力データ

模擬試験受験が必須ではなく、受験している生徒はわずか1名である。そのため対外的な学力データは少ないが、校内での実力テストでは、4月の第1回目は学年で最下位で校内平均より2.8点低かった。しかし8月には校内平均より0.4点低い結果となった。

リサーチ・クエスチョン

クラス全体の雰囲気作りに努め、音読指導の方法を工夫し、家庭学習で音読筆写などの課題を出せば、教科書の基本的な語彙の定着につながるのではないかな。

仮説・実践・検証

仮説1

⇒

実践1

⇒

検証1

第一に、授業の雰囲気作りに努めるために、クラスルームイングリッシュを増やす。生徒が質問を聞きやすい状況になるように生徒との信頼関係を築くように心がける。第2に、声を出して読む量や聞く量をふやすために、音読の時間を増やす。英語の音に触れる機会を増やしていけば、声を出すことに意欲的になり、授業中の音読活動に積極的に取り組むだろう。

聞く量、読む量の増加を目的として、音読の時間を増やした。個人で読む。ペアで読む。授業のかかなりの時間を音読の時間にかけた。また本校に今年度より無線レシーバーの機器が導入されたので、音を正確に聞き取るためだけでなく、「英語の音に慣れること」、「口を動かすこと」のために、シャドーイングの方法をとった。本文理解には授業中の音読、本文復習にシャドーイング練習、最後に個々の教科書の音読をテープに録音させた。

音読は恥ずかしいが楽しいようで、まずまず意欲的に音読に取組めた。英語で指示をしても生徒に伝わらなかったことが多かったが、少しずつ改善された。個人で読んだり、ペアで練習することで、英語の音に対して、抵抗が減ってきたようである。単語テストを週に1回実施しているが、音読練習した後ではテスト結果が違って来た。生徒に対する動機付けとしては音読は効果的だと思う。

仮説2

⇒

実践2

⇒

検証2

授業中の音読活動の時間を増やし、内容を工夫し、各課が終わるごとに、音声を重視する音読テストを実施すれば、授業中に教科書の本文を意欲的に読み、また家庭でも音読練習するようになるだろう。そして次の段階として音読したものを自分のものとして、暗誦練習や、暗誦テストへすれば、音読への意識向上・練習量増加につながるだろう。

授業中の音読には生徒達も慣れてきて、ほぼ読むことができたので、音読テストをまず実施した。評価基準を前もって提示しておいたので、事前に生徒は授業や家庭でもよく練習していた。その結果ほぼ全員が合格点であった。また、その次の課では、暗誦テストを実施した。「教科書の本文の発音者になりきり、発表する」という暗誦テストだったが、生徒は音読テスト以上に、授業や家庭でも練習をし、発表できた。

事前に音読テストや暗誦テストをすると学期当初に提示していたので、生徒は準備ができていた。音読テストや暗誦テストを目標と設定したので、授業での音読が評価に結びつくことが分かり、一層、元気が取組むようになった。実際、テスト実施後に、事前に家庭で音読した回数を確認すると、数十回と答える生徒もあり、目標を明確に設定すれば、生徒はその方向に向かうことが良くなった。

仮説3

⇒

実践3

⇒

検証3

授業で教科書の本文を何度も読み、正確さや流暢さに留意してすらすら読めるようになれば、家庭でも自分で教科書の本文を読める。そして音声面だけでなく、音読筆写に取り組めば、教科書の語彙や表現の定着につながるだろう。

音読の重要性が生徒に伝わってきたのか、全体として意欲を失わず、音読に取組めていたので、音読練習、音読テスト、暗誦テストの後に、英文筆写テストを行った。文字での確認をすることを事前に予告してあったが、生徒は苦しみながらも、やり遂げた。また教科書だけでなく、週に一回の単語テストでも音読筆写プリントを単語テストごとに前もって書かせるようにした。

定期試験での語彙問題の正答率は93%であった。また文単位で答える問題の正答率も80%と非常に高いものであった。生徒達の感想も成績と連動し、実感を伴うものであった。また単語テストについては年度途中から授業で音読した後、音読筆写プリントを授業で毎回、事前に配布したが、配布後は不合格者(50点未満)の数がクラスでも減った。学年全体でも激減した。

研究の成果

音読に取り組み始め、授業中に生徒が参加する活動の時間が増えた。本文理解後何回も本文を読み、音読発表したり、本文を暗記し、暗誦発表した。生徒はその一連のトレーニングを繰り返したのだが、結果音読により動機付けでき、語彙力も少しは伸びたと思われる。学年全体でも音読重視の方向で取り組み、他教員と連携したことも大きな成果であった。教科書の語彙の定着については定期テストで同じ形式のテスト問題での正答率に変化が現れた。家庭学習ノートを作成させ、毎日自学自習する習慣をつけさせたことも語彙の定着には役立った。

今後の授業改善の課題

生徒達は「英語はやるのがたくさんあって大変」といながらも、いろいろな活動に取組んでいた。教師が明確に目標を持って進めれば、生徒はその方向に向かうことを改めて確認し、年度当初の目標設定や授業のデザインの重大さを痛感した。今後の生徒の目標にも「もっとすらすらと英語が読めたり、話せるようになりたい」という意見が多く出た。今後は暗誦だけでなく、スピーキングの活動内容を工夫し、授業改善に努めていきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-822-5270

電子メール

etsuko.kagoo@kt5.kochinet.ed.jp